

和光



発行 〒894-0007 鹿児島県奄美市名瀬和光町1700

国立療養所 奄美和光園

電話 (0997) 52-6311

平成28年2月1日
(2016)

第100号

- 表紙 1
- 今年の展望 2~3
- 「和光」第100号の発刊にあたり 4
- 合同慰靈祭開催 5
- キャンドルサービスを終えて 6
- 「ふるさとお楽しみ便」贈呈式 6
- 加計呂麻島ハーフマラソン大会に参加して 7

- 上棟式!!! 8~9
- ハンセン病療養所医療従事者海外研修を終えて 10~12
- ハロウィンの日 13
- 第27回ハンセン病コ・メディカル学術集会に参加して 14~15
- 第13回国立病院看護研究学会学術集会に参加して 15
- 永年勤続表彰を受けて 16~17
- お知らせ 17
- 人事異動・和光園日誌・編集後記 18

基本理念

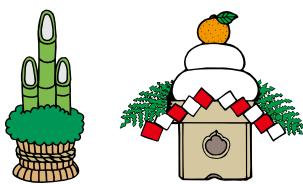
私たちは、入所者一人ひとりの生命の尊厳と人権を守り、豊かな自然環境につつまれた穏やかで心豊かな療養生活と、安全で安心できる医療を提供します。



上棟式

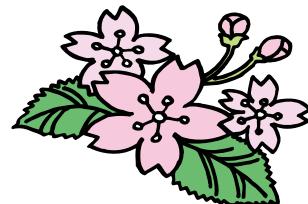
基本方針

1. 入所者の終の棲家として心穏やかな暮らしを支えることを基本とします
2. 入所者自治会とよく話し合い 入所者本位の運営に努めます
3. 入所者一人ひとりの日々の変化にきめ細かく対応いたします
4. ハンセン病による後遺症や合併症の対策をしっかりと行います
5. 入所者が高齢化していることを念頭に置き 健康保持の活動や生活を支える医療 さらには感染予防・認知症対策に重点を置きます
6. 地域医療とも連携し 適切で標準的な医療の提供に努めます
7. ハンセン病に対する正しい知識を普及させるため 啓発活動に努めます
8. 開かれた療養所となることを目的に地域社会との交流促進に努めます
9. 入所者の健康と安全な生活に貢献できるようすべての職員の質の向上に努めます



国立療養所奄美和光園
園長 加納 達雄

今年の展望



平成二十八年の奄美は穏やかな幕開けとなりました。元旦から奄美和光園にも新春を告げるに相応しい陽光が降り注ぎ、周りの山々にも目覚めを促しているようでした。やがて新緑が芽吹き、緑の濃淡の中に緋色の花が浮き出てくるはずです。ウグイスやメジロが飛び交い、園内にも生き生きとした活気がみなぎってきます。和光園を取り巻く自然には、常に新しい生命の息吹を感じさせてくれるものがあります。新しい年を迎える、今年一年が全ての人にとって有意義な一年となるよう希望いたします。

さて、私たちは今年も和光園で仕事に取り組みますが、今年はどのような一年になるのでしょうか。少し、今年を展望してみましょう。まず、和光園の医療に対する第三者評価として、二度目の病院機能評価の受審をすることになります。これは、入所者に対する本来の医療と地域医療としての一般診療を対象としています。現在の和光園の組織そのものが第三者の評価を受けることになります。医療に関しては普段から良質の医療を心がけ、受審に向けては昨年から準備してきました。前回以降の五年間の総決算となります。その次に、昨年から工事が始まっている一般舎の新築工事が早い内に完了します。これに伴って、園内の最遠部に住む入所者の転居が行われます。今まで古い住宅に住んでいた方々に新居での生

活を楽しんでいただけるものと思っています。これに伴って、古い住居の取り壊しと跡地整備を計画していきます。さらに、施設整備関係では、園内のバリアフリー化の一環として、今ある講堂の補修工事を予定しています。講堂では、いろんな催事が行われますが、車椅子での講堂へのアクセスを改善するのが目的で、併せて講堂内外の古くなった部位の補修も行います。さらに、記念公園と納骨堂周辺の整備も計画しています。また、各療養所に残る歴史的建造物の保存事業の一環として、和光園では、旧納骨堂の補修作業が行われることになっています。今回はあくまでも補修ですが、将来的な保存の道が開かれるものと期待しています。さらに、和光園の苦難の歴史を残す資料館（交流会館）の開設の準備作業に着手したいと思っています。このように少しずつですが園内も変わっていきます。

和光園には皆さんご存じの通り、生活区域と医療区域があり、入所者はその両方へ自由に行ったり来たりしています。ところが職員は、生活区域では主として介護員、医療区域では看護師となるべく働く場所が分けられている感じがしていましたが、ここ数年は職員もどちらの区域にも出入りするようになってきました。和光園の職員全員で入所者の生活を支えていくという方針が実践されていていると感じています。医療現場でも介護現場でもそれを受ける人々の考え方を中心になるという原則も理解されていています。私たちの仕事は入所者それぞれの人生の晩節を支えることになりますが、入所者はハンセン病による重複障害に加え高齢化による心身の衰えが目立つようになり、日々の生活に困難を感じ

じている人が多くなっています。この日々の生活の困難を医療と介護の両方の力で軽減する事が私たちの仕事そのものとなっています。先ほども書きましたが、医療は病院機能評価で第三者からのチェックを受けることになっています。では、介護はどのようにチェックを受ければいいのでしょうか。現在、常駐型か訪問型かは別にして、園内では全ての方々へ介護を提供する体制が整っています。介護現場は和光園における最も大切な仕事場ですが、「言うは易く行うは難し」というのも介護の現場です。最前線ならではの難しさがあると感じています。ルーチンで行う仕事と入所者のその日の体調や気分に合わせて行う仕事があります。前者は計画性を持つことができますが、後者ではそうはいきません。体調や気分を察知する能力が要求されます。相手をよく知る職員でないと入所者はその日をうまく過ごせません。慣れない人が行うこととはかえって生活の混乱を招いてしまいます。ここに介護の難しさとおもしろさがあるのだと思います。この「難しさ」を「面白さ」に変えていくのが、職場での日々の工夫です。この工夫を考え出すのも職員の仕事だし、そのために職場でのカンファレンスを活用して欲しいと思います。さらに、その中から選りすぐりの「工夫」については、看護研究を通してさらに考察を重ね、和光園の介護レベルの向上に寄与して欲しいと思います。この「難しさ」を「面白さ」に変えていく工夫を考え出すという楽しみを、是非感覚として覚えて欲しいと思います。皆さんがやっている看護研究の面白さをここに見つけて欲しいものです。介護に対するチェックは、結局は、自分の生活の困難をどのように軽減できたかを知る一人ひとりの入所者だと思ってください。このため、いつもの体調や気分ではない入所者がいる場合には、その人の側で支

えてください。このことも含めて、昨年は、屋内廊下等の清掃業務に関しては外部委託しています。職員が入所者の側で仕事ができるよう必要な体制整備をしていきたいと考えています。その他、入所者の方々が園内で暮らしていくのに安全性と快適性が向上することについては、気がつき次第提案していただきたいと思います。

従来から和光園では、地域に開かれた療養所となるような運営を心がけてきましたが、今年もこの方針を守っていきたいと思っています。県の事業である「親子療養所訪問」、奄美市教育委員会を中心になっている「ふれあい和光塾」、夏祭りを始めとした園の各種行事、児童・生徒やハンセン病に関心のある人々に対する啓発活動などを通して、多くの市民に足を運んでいただけることを願っています。さらには、一般診療を通して、皮膚科を専門とする医療機関としても地域に貢献したいと考えています。入所者の方々に対しては、園外へのレクレーションやショッピング、看護課が行っている季節の催事を楽しみにしてもらい、一日一日を元気に送って欲しいと思っています。職員の皆様方には、入所者一人ひとりの生きがいを探し当て、健康を維持し良好な人間関係が保てるよう全力を挙げて支援して欲しいと思います。入所者と共に暮らし、この一年が和光園で過ごす全ての人々にとって有意義な年になるよう私たち自身も変化し続けなければならないようです。皆様方のご理解とご協力をお願いします。



「和光」第100号の発刊にあたり

記念すべき「和光」第100号をお届けいたします。

奄美和光園は昭和18年(1943)に開園し、今年74年目を迎えます。自治会機関誌「和光」は、開園から4年後の昭和22年(1947)7月に創刊されました。その内容の多くが入所者の寄稿による詩・短歌・俳句・エッセーなどの文芸的なもので、アメリカ統治下や本土復帰後の過酷な療養生活において、多くの入所者の娯楽の1つであったと聞きます。また、当時はまだ無名であった田中一村画伯のアダンの絵が表紙を飾るなど、体裁からして豪華な機関誌でした。しかし、寄稿者の漸減や、編集委員達が相次いで他界したことなどから、昭和44~45年に休刊となりました。

次に、職員による広報誌「和風」が誕生しました。新任・退職者の挨拶や行事予定、職員の文芸や職場ルポなどの内容で、「和光」に代わる役目を務めていましたが、編集委員の転勤や退職等でいつの間にか消滅してしまいました。

その後、20年近くたった平成2年(1990)5月、奄美和光園開園50周年を間近に控え、「和光」が復刊されました。編集委員は自治会役員と職員からなり、園内の行事、俳句・短歌、和光園日誌、人事異動など、内容は現在の「和光」に受け継がれています。また、旧

「和光」は菊池恵楓園で印刷、「和風」はタブロイド型のガリ版かタイプ印刷と、療養所内で行われていた印刷製本も、時代を経て「和光」は外部の業者による印刷へとかわり、さらに、奄美和光園のホームページで常時閲覧

できるようになり、自治会機関誌であった「和光」は、一般病院に引けを取らない病院機関誌へと成長を遂げました。

残念ながら入所者の高齢化にともない、現在の編集委員は職員のみとなってしまいましたが、入所者の気持ちに沿うような内容を意識して、毎号編集にあたっています。特に表紙の写真においては、遠出が難しくなってしまった入所者の方々に、奄美らしい風景から若い頃を思い出し、日差しの強さや海の色から季節を感じていただけるよう、編集委員が島内を散策して撮影した写真から毎回選定しています。

復刊当時の自治会長が「和光」第1号に、「願わくば、和光園機関誌が発刊されるのを機に、ハンセン病が正しく理解され、地域住民のより以上のご支援を心から伏してお願いする。」と綴ったように、入所者の娯楽としての機関誌であるとともに、外部の人々への啓蒙誌であることを肝に銘じ、「和光」の発刊を続けていきたいと思います。

編集委員長
馬場 まゆみ



和光
第1号
(1947)

和光
第64号
(2005)

和光園ロゴマークが決定!!

このマークの外側に太陽の光と、内側には奄美和光園の横文字を2文字入れて「輝かかな和光園が暖かい光で輝まれている」をイメージしてみました。

今回採用されたロゴマークは、地図の外側に太陽の光と、内側には奄美和光園の横文字を2文字入れて「輝かかな和光園が暖かい光で輝まれている」をイメージしてみました。

この文字を使用したのは、圓形化の波に乗り、大きく開かれた施設になるように、との願いが込められています。

合同慰靈祭開催

平成27年度合同慰靈祭がご遺族、入所者、行政関係者、職員ら70名が出席して11月5日に当園講堂にて執り行われました。

はじめにこの1年間に亡くなられた3名を含む380柱に黙祷を捧げ、続いて加納園長は「和光園の歴史的使命を全うできるよう職員一同力を合わせていくことを誓う」と述べられた上で「いわれ無き差別偏見に苦しめた故人を偲び、御靈の冥福を心より祈りたい」と哀悼の意を表されました。

次に遺族代表は「誰もが隔たり無く、安心して暮らせる社会形成を願うとともに、入所者の最後の一人まで住み慣れた和光園で終焉を迎えるよう、関係機関に尽力頂きたい」と訴えられました。

続いて加納園長をはじめ、参列者全員で祭壇に菊の花を手向けたあと、納骨堂で焼香を行い380柱の御靈の安らかなご冥福を祈りました。

福祉室 井上 清仁





キャンドルサービスを終えて



12月24日本曜日、クリスマスイブの午後からゆらいの郷ホールにて、厳かにキャンドルサービスが開催されました。司会者の「聖歌隊入場」の声と共に、電気が消された真っ暗なホールに、ローソクのキャンドルを片手に聖歌隊のユニフォームを着けた職員9名が「きよしこの夜」を歌いながら入場しました。



ホールにはたくさんの入所者や職員が集まって下さいました。「きよしこの夜・赤鼻のトナカイ・ジングルベル」の3曲を吉原総看護師長の全身をリズミカルに

動かしての指揮姿に笑みをこぼしながら歌うことができました。最後は参加者全員による「きよしこの夜」の合唱でクリスマス気分を満喫しました。

キャンドルサービスの後はお茶会で、給食で作っていただいた「ふくらかん」に生クリームをのせた手作りケーキをほおばりながら皆で楽しいひと時を過ごすことができました。

『メリークリスマス!』

看護サービス委員 惠原 千加代



「ふるさとお楽しみ便」贈呈式

年末恒例になっている鹿児島県からの贈り物「ふるさとお楽しみ便」が、12月25日(金)に届けられました。

当日は県健康増進課長と担当者2名、名瀬保健所長と疾病対策係長が来園され11時より健康増進課長が園内放送で「知事挨

拶」を代読された後、入所者代表に県内各地の特産品を詰め合わせた「おたのしみ便」を贈呈されて式は滞りなく終了しました。

福祉室 井上 清仁



加計呂麻島ハーフマラソン大会に参加して

それは悪夢の一言から始まりました。

「あんたあ去年は10km走ったやろ？この間の桜マラソンは15.5km走ったやろ？なら今年はハーフば走ったい」

去る11月8日(日)に開催された『2015 加計呂麻島ハーフマラソン大会』に参加する際に、某班長から投げかけられた言葉でした。

その名のとおり奄美大島の南部に位置する加計呂麻島で行われる大会で、美しくのんびりとした風景に囲まれ、沿道で応援する地元の方々のあたたかいおもてなしを受けられることが魅力のひとつです。奄美群島はもちろん、遠くは関東地方から参加するランナーもいるほどです。

ならばコースものんびりしているのでは、というと決してそうではなく、むしろかなりハードな起伏が待ち受けていることも特徴です。それも1箇所や2箇所ではありません。もともと長距離が得意でない私なので、実際に昨年走った際には心が折れそうでした…

半分上司命令(?)で参加することになり、練習を…と思っていたのですが、仕事に追われてか、はたまた単なるサボり癖か、結局当日までに走ったのはたった1回。大丈夫なのだろうかと思う間もなく当日を迎えることになりました。

当日は気温が25℃を超えて、11月にしてはちょっと…なコンディション。雨が降らなかったのが幸いです。和光園の有志も10



名ほど参加し、そのうちハーフを走るのは私の他に、園のエースY氏の二人だけ。お互いマイペースを誓い合ってスタートです。

誰でも走り始めは調子が良いもので、「意外と疲れずに完走できるかな～」と思っていたのですが、それも束の間。あの起伏が私の浅はかな考えを木つ端微塵してくれました。上っても上っても頂上にたどり着かない…壁のようです。頂上だと思ったら急な下り坂で足に負担が…。幾度となくこの起伏を乗り越え、終盤にさしかかった頃には歩いているのとさほど変わらないスピードで走っている私。当然美しくのんびりとした風景を眺める余裕などありません。

ようやくゴール間近になり、聞き覚えのある声で「頑張れ～」と応援が。短い距離で参加した、私より後にスタートし、先にゴールした和光園の有志の方々でした。最後の力を振り絞り、どうにかゴールテープを切ることができたそのタイムは、約2時間40分。タイムより完走できたことに、妙にほっとしました。

苦労の甲斐あってか、大会後に行われた抽選会で、黒糖焼酎その他諸々のセットが当りました。「走って良かった」と思えた唯一の瞬間でした。(笑)

庶務係 米丸 淳一



上棟式 !!!

12月4日、新築中の居住者棟にて「上棟式」を行いました。

当初12月1日の予定でしたが、洒落にならない程の悪天候で延期。当日の天気は延期して良かったと思える快晴!めでたい行事にふさわしい空模様となりました。

実は・・・、上棟式を計画したものの、参加者は少ないのでないかという個人的な予想をしていました。よって地鎮祭と同じで物静かな式になるのではという読みで、撒く餅はほどほどな感じでいいのではないかと思いきや・・・。用意された餅は、餅米にして30kg!!! 確実に余るだろうと・・・。

ところがどうでしょう。時間が近づくにつれ、どこからともなく集まつてくる「人々」。入所者、職員、保育園児。式が始まる頃には、工事関係者も含めると50人に届きそうな人数となっていました。

いよいよ始まります。施主として、本来は入居予定者ですが、代わりに4名の職員が屋根に登りました。屋根の上では、習わしに沿つて、式が肅々と進められます。一方屋根の上が見えない「待ちわびる人々」は、いまかいまかとざわつきが始まっていました。

一通りお祈りが終わると、いよいよ「撒きもの」です。4名の姿が見えると、一斉に歓声が上がりました。みんなの姿(格好)見ると、スーパー袋や籠など、本当に用意のいいこと。

とくにかけ声はありませんが、4名が一斉に餅やお菓子を撒くと、先ほど以上に大きな、天まで届きそうな歓声が上がりました。「みなさ~ん、気を付けて!!」

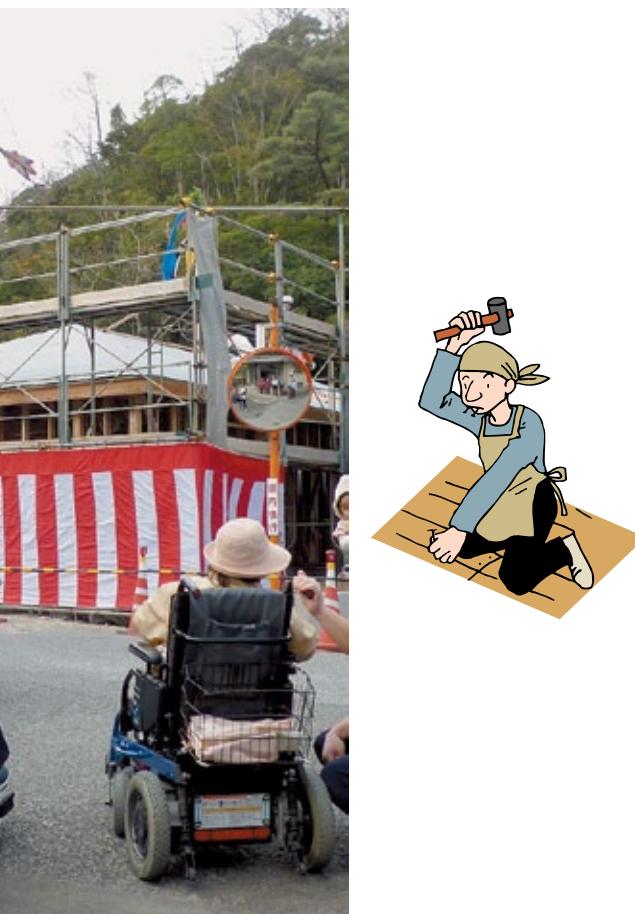
の声掛けもかき消されてしまうほどの歓声。かわいいお菓子も用意されていて、保育園児の元気な声も響きました。餅も、「これでもか!」と言うくらいの量。それでも歓声は、始まった時のボリュームのまま途切れることはありませんでした。用意されていたお菓子や餅も一つ残らず、集まつた人に行き渡りました。入所者、園児、職員のパワーを感じるひとときでした。

上棟式の後、入所者や職員から、「こんなこと(イベント)は初めてだった。楽しかった。」という声が聞かれました。自分自身も昔(小学生)を思い出し、テクテクと上棟式に出向いて行ったころの記憶が蘇り楽しい行事となりました。

今後の、居住者棟の更新(新築)計画に弾みが出来たと実感しています。

会計班 堀口 広文





ハンセン病療養所医療従事者海外研修を終えて

平成27年11月7日～13日の7日間にかけて、フィリピン共和国での「ハンセン病療養所医療従事者海外研修」に参加させていただきました。今回の研修はハンセン病医療・看護の理解を深めるとともに他国の保健医療の現状を知ることを目的とし、WHO西太平洋事務局、クリオノ島のハンセン病療養所、ハンセン病資料館、セブ島の皮膚科クリニック、ハンセン病療養所などの視察や各施設での講義・実習でした。フィリピン共和国は西太平洋地域におけるハンセン病新規患者数が多い国であり年間約1700名が発症しています。新患発症のない日本から比べると大変多く感じますが、フィリピンでは年々減少しており年間の新患発症がWHOの新患発症制圧目標に達しているとのことです。これまで和光園での経験しかなく、ハンセン病後遺症を持つ患者様の医療・看護にしか関わりのない私にとって今回の研修はとても貴重な経験でした。

フィリピンのハンセン病隔離地域であったクリオノ島では日本と違い、国やWHOの政策・支援、宗教（カトリック）の支援から患者、患者の家族（4世代）、医療者、健常者が共に支えあいながら生活している現状を知りました。これまで

WHOはMDTを使い患者数を減らすことが目標であったそうです。しかし現在は治療や偏見に対する働きかけから制圧目標を達成しているため今後は、日本のハンセン病療養所の行っている患者・回復者の継続的ケア（身体的・社会的リハビリ）、障害を予防する技術等を考えなくてはならないとのことでした。

今回の研修で最も印象深かったことは、これまで教科書でしか見たことのないハンセン病新患の症例、検査、診察状況、そしてハンセン病を抱えながら生活している現状を見させて頂いたことです。「百聞は一見にしかず」と言いますが、今回の研修で見聞きしたこと、感じたことを心に置き、今後も入所者の方々が生活しながら毎日が「Happy」と感じていただける看護・介護を提供していきたいと思います。

今回、このような貴重な機会を与えてくださいました、加納園長、吉原総看護師長をはじめ職場のスタッフの方々、研修出発前から関わっていただきました事務の方々に深く感謝いたします。

不自由者棟
副看護師長
本田 千鶴子



クリオノ島



クリオノ島での歓迎（回復者のバンド隊）



クリオン島市街地（療養所&街並み）



バンドに合わせダンスで歓迎



歓迎のおもてなし（食事）



WHO（西太平洋事務局）

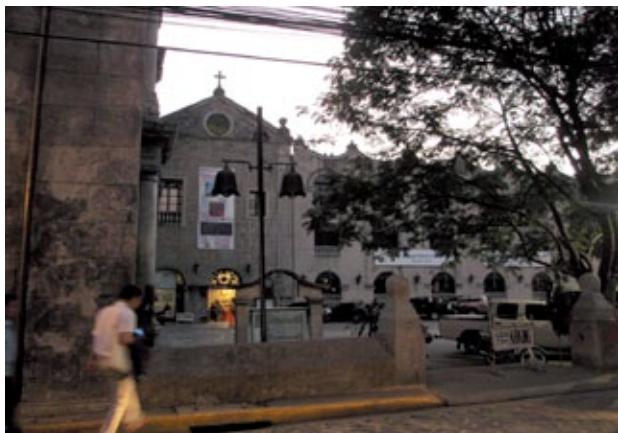


WHO（講義）



ハンセン病資料館（太風子油）Dr. クナナン





世界文化遺産（フィリピン最古の石造建築 サン・アグスティン教会）とお巡りさん



セブ・スキンクリニック（講義と実習）



セブ島エバースレイチャイルズ療養所の職員との夕食会



グリーンパスポート

ハロウィンの日 (ある秋の晴れた日)

「Trick or Treat !!」

「お菓子くれなきやいたずらするぞお」

日本の各地でハロウィンパレードのニュースが流れる中、あまみ保育園でも仮装パレードをおこないました。

園児たちもこの日は小さな悪魔に変身。でも、入所者へ歌をお披露目したりとほんとはかわいい天使達。途中、園内で工事中の職人さんからもお菓子をたくさんもらいました。

お菓子なんかもらわなくてもいたずらなんかしない子供たちだけどやっぱりた

くさんのお菓子をもらって大喜びの園児たちでした。

皆さんどうもありがとうございました。

あまみ保育園 川畠 美奈子



園児たち



仮面



歌のお披露目



入所者と園児

第27回 ハンセン病コ・メディカル学術集会に参加して



平成27年11月27日～28日の2日間、熊本の菊池恵楓園の恵楓会館で第27回ハンセン病コ・メディカル学会が開催されました。テーマは「より添い、ともに歩き、ともに生きる」でした。奄美和光園からは、病棟の政木看護師、不自由者棟の吉田看護師、そして治療棟の黒木介護員が発表しました。学会参加者は、吉原総看護師長、岩越看護師長、面高看護師長、篤看護師、牧原看護師、中川作業療法士の合計9名が参加しました。当園の看護研究発表は、研究的な視点をしつかり持った発表内容でした。

「フィッシュ哲学に基づいた職場環境へのアプローチ」と題し、初めての学会発表で緊張しましたが、他施設の発表を聞くこともでき、学びの多い機会となりました。今後も研究メンバーが考えた、スローガン（広げよう心つながる看護の輪）をモットーにし、フィッシュ（遊ぶ・人を喜ばせる・注意を向ける・態度を選ぶ）に基づいた職場環境のアプローチが継続できるように、他スタッフと連携を取り、実施していきたいと思います。また、菊池恵楓園の施設見学の際は説明もしていただき、ハンセン病の歴史を再学

習することが出来ました。「入所者のために今、私にできる事は何か」と常に考えながら、入所者の方々と接していくたいと思っております。

(病棟看護師 政木 美香)

銀杏の葉が黄金色に染まる頃、「不自由者棟入居者の看取りに関する看護師と介護員の思い」と題し、学会発表させて頂きました。メンバーと共に熊本城で健闘を祈り、熊本の料理を堪能し臨みました。本学術集会のテーマは、「より添い、ともに歩き、ともに生きる」とされ、如何に多職種で連携し様々な問題に取り組んでいくかでした。内容も「エンド・オブ・ライフケア」「看取り」「ライフストーリー」といった高齢化に伴う療養所の現状に即したものが多くかったです。発表の結びで、「結論：その人らしい最期を支え、安らかな死に至るまでの時間を大切に寄り添う」と言い終えた瞬間の充実感は今でも忘れられません。この貴重な経験から、私自身のライフストーリーは、まさに和光園での出会いや皆様が共にあることを強く実感した次第です。

(不自由者棟看護師 吉田 美和子)

「不自由者棟における日々のレクリエーションの在り方」と題し、発表しました。和光園以外のハンセン施設を見るのは初めてのことととても楽しみにしていましたが、学会での発表経験がない私には、思う存分施設を見学する余裕がありませんでした。和光園から同行した上司、仲間たちには「緊張していないよ」と虚勢を張りながら気持ちを落ち着かせていま

した。

特別講演、教育講演共に興味のある講演でしたが、私が特に耳を傾けた口演は一日目の「エンド・オブ・ライフと看取り」でした。このテーマは現在の国立療養所において、今後最も重要視される課題であることは間違いない、発表後は多くの意見・質問があり、皆一様に関心が深いと改めて感じました。

(治療棟介護員 黒木 貴雄)



～発表者全員より～

この研究にご指導、ご協力して下さいました皆様方に心より感謝申し上げます。今後も自己研鑽を続け、入所者によりよい看護・介護が提供できるよう努力してまいります。



第13回 国立病院看護研究学会学術集会に参加して

平成27年11月28日、千葉の幕張メッセで開催された第13回国立病院看護研究学会学術集会に参加させていただきました。

今回の学会は、「看護と意思決定」をテーマに、一般演題110題（口頭発表33題、ポスター発表77題）の発表や、シンポジウム、特別講演が行われました。

私は、ポスターセッションにて、「脳梗塞後に開口拒否を生じた認知症患者に対して行った生活習慣を生かした嚥下訓練の1例」をテーマとして、参加させて

いただきました。会場でのたくさんの質問を通して、更に研究を深めることができたと思います。また、他の施設の研究発表や特別講演を聴講することができ、学びの多い1日でした。

この研究をまとめ、学会参加に至るまでにご支援、ご協力くださいました皆様方に感謝いたします。このような機会を与えてくださいり、ありがとうございました。

治療棟 松下 恵美



永年勤続表彰を受けて

今年 勤続30年になりました。

民間2年を経験してからの就職、いきなり国立療養所は統廃合の嵐。明日は廃止か!! 大勢の方が心配する中、根拠のない自信で『なんくるないさ』と思いつながら30年。

このたびは、30年永年勤続表彰を頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。

私は、昭和60年4月に国立嬉野病院に採用されて以来、今日までの間、6施設の検査科の業務に励んでまいりました。

このような受賞の機会を頂きましたことは、皆様の深いご厚情の賜物であると

30年永年勤続表彰していただきありがとうございました。

「30年経ったのか」

こたつでちびちび黒糖焼酎を飲みながら思いにふける親父の心境である。

30年。その間いろいろな施設で多くの先輩方、同僚に出会いそしていろいろ教わった。またその間数えきれないほどの後輩達を迎えた。

「あのころの未来にぼくらは立ってい

あれから30年 これまでこれたのも周りの方たちの協力あっての賜物、感謝、感謝。あともう一仕事できる時間があります。全力を注ぎ頑張ります。

診療放射線技師長 大城 善栄

存じます。このたびの永年勤続の表彰を受けましたことを胸に、これからも、職場での仕事に励みながら、職員の一人として病院の発展に尽くして参りたいと存じます。今後とも、皆様方の尚一層のご指導とご鞭撻をお願い申しあげます。

臨床検査技師長 宮崎 秀喜

るのかな」あるヒット曲ではないけれど採用していただいた昭和60年当時の自分に会って未来を聞いてみたいものである。たぶんその未来に立っていない自分を詫びないといけないだろう。

後、退職まで数年。未来（目標）を持ち続けている後輩達に少しでも手助けできるよう精一杯頑張りたいと思う。

事務長補佐 広瀬 晃

「君たち将来何になるの？」
「こ～むい～ん！」

このCMがまだ生まれていない昭和60年、私の公務員生活が始まりました。独立勤務も含め30年、その30年間で覚えてることといえば、マイナスの出来事ばかり。それでも続けられたのは、自分の力では全くなく、支えてくれた職場仲間、励ましてくれた家族、すべてそのお陰だと思っています。

公務員の宿命で、異動の度に別れと出会いに不安と期待を抱きながら過ごしてきました。算数レベルの計算に悩み、業者を睨み、患者に頭を下げ、色々な経験を重ねてきたつもりです。当然好きでは

このたびは、20年永年勤続の表彰を受けましたことを大変うれしく、感謝の気持ちでいっぱいです。私が長年勤務してこられたのも、多くの皆様方のご指導とご協力のお陰だと心より感謝申し上げます。

国立病院に就職し、今日まで4回の転勤を繰り返し、その間看護学校の経験もさせて頂きました。その度に立場も変わり悩むことの多い人生でしたが、周りの人々に支えられ、看護のすばらしさや人としての生き方を教えられ、充実した日々

ない業務もありましたが、そこはいい意味で「仕事だもん！」と割り切れたことが続けられた技でもあると自負しています。

天職とは思っていませんが、「勤続表彰」を眺めると「宣誓書」を読み上げた時の記憶が戻ってきて、一瞬体温が上がったような感覚になりました。定年まで勤続できるかは正直わかりませんが、残りの人生も考える時期でもあるので、「今やること」「次にやること」を見極め、年齢相応の公務員生活を過ごしたいと考えています。

会計班長 堀口 広文

を過ごすことができました。

「年年歳歳花相似たり、年年歳歳人同じからず」(私の尊敬する方から頂いた言葉です)、来る年ごとに花の姿は変わりないけれど、来る年ごとに見る人の姿は変わる。同じ日は二度と来ない。多くの方との出会いを大切に、今私にできる精一杯の努力を続けてまいりますことを誓います。

副総看護師長 後藤 祥子

お知らせ

国立療養所
奄美和光園
ホームページが
平成28年
1月22日に、
リニューアル
されました。

<http://www.nhds.go.jp/~amami/index.html>

人事異動

(平成27年11月1日～平成28年1月31日)

H27. 11. 1	佐々木 和美	看護師	復職（育児休業）
H27. 11. 30	松元 くるみ	看護師	任期満了（臨任）
H27. 12. 1	永 美保乃	看護師	復職（育児休業）
H27. 12. 31	加藤 昭吾	看護助手	辞職
H27. 12. 31	松下 徳寿	看護師	辞職
H28. 1. 1	松元 くるみ	看護師	採用

和光園日誌

(平成27年11月1日～平成28年1月31日)

- H27. 11. 5 合同慰靈祭
 11. 11 施設見学（奄美看護福祉専門学校）
 11. 12 あまみ保育園（消防）立入検査
 11. 16 一般入院 67才男性
 11. 18 施設見学（朝日小学校）
 11. 24 会計実地検査（～27日まで）
 12. 4 人権相談（法務局）
 医療施設立入検査
 12. 8 職員特別健康診断（～10日）
 12. 18 一般入院 82才女性
 12. 24 クリスマス会（キャンドルサービス）
 12. 25 ふるさとあたのしみ便贈呈式（鹿児島県保健福祉部）
 親子療養所訪問
 12. 28 仕事納め式
- H28. 1. 4 仕事始め式
 1. 14 一般入院 87才女性
 1. 26 施設見学（朝日中学校）
 1. 27 病院機能評価（～28日まで）
 1. 29 一般入院 87才女性



福岡から奄美へ引越し、和光園で勤務させていただいて、早いもので三年目となりました。最初は風習や方言などの違いに困惑することも多かったのですが、島の方々の優しさに触れ、行事等に参加して行くうちに、次第に馴染む事ができ、奄美に来て本当に良かったと思っています。

創立70周年記念式典が自分の誕生日の日であった事、この度和光編集委員となって、記念すべき第100号の編集に関わられた事を思うと、自分と和光園は不思議な御縁があったのだとつくづく感じております。多忙な日々をお過ごしの事と思いますが、皆様どうぞくれぐれも御自愛ください。

編集委員 下川 満